

A. 事業内容

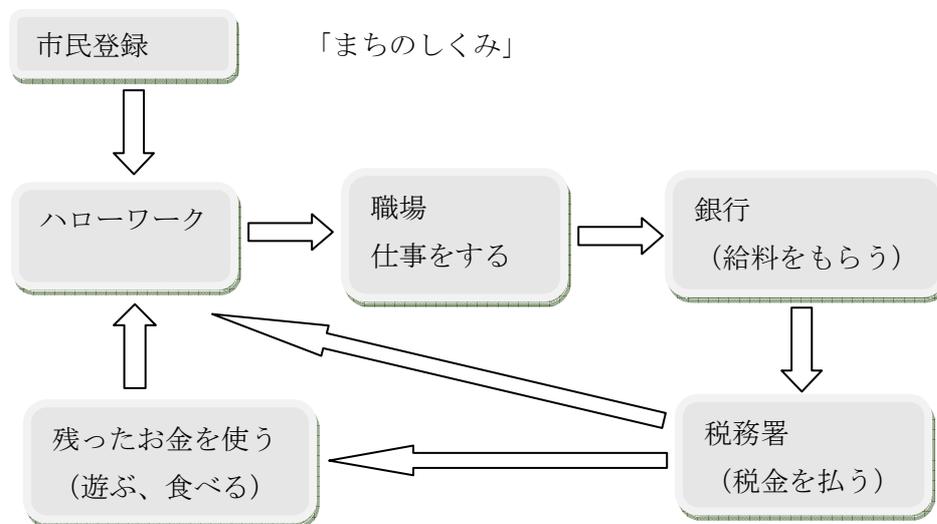
【事業名】	こどものまち運営		
【事業分野】	学術・文化・スポーツ	【協働の形態】	事業共催
【行政担当課】	安城市教育委員会生涯学習課	【協働のパートナー】	愛知教育大学大村研究室

【事業概要】

もともとはドイツの「ミニ・ミュンヘン」をお手本にした、子どもがつくる小さなまちです。子どもたちが主体的に考え実行することにより、自立意識の高揚や共同作業による助け合いの気持ちを深め、社会教育において健全育成を図ることを目的としています。

子どもたちは、自分のやりたい仕事を選んで働き、お金（こどものまちだけで使える模擬通貨）をもらいます。もらったお金は、こどものまちの中で物を買ったり、遊んだり、自由に使えます。どんな施設を作るかも子どもたちで考えます。このまちの市民は子どもたちなので、原則スタッフ以外の大人は親でも中に入ることができません。

こうして、子どもたちが中心となって、面白さ、楽しさを追求しながら思いっきり主体性と創造力を発揮し、遊びながら、仕事をする事、コミュニケーション、社会の仕組みを学びます。



【背景・きっかけ】※なぜ協働を行ったか？（800字程度）

名古屋で「こどものまちみずほ」に携わっておられた愛知教育大学大村教授から、大学と安城市生涯学習課との提携事業として実施してはどうかと提案されたのがきっかけです。

さらに、市民企画講座などで、市生涯学習課と係わりが深く、こどものまちみずほを実施している NPO 名古屋おやこセンターとよく似た理念の団体でもある NPO 法人おやこでのびっこ安城が加わることとなりました。

同団体は、あいちこども NPO センターの団体会員でもあり、10年以上安城市で NPO として活動してきた中で、豊かな人脈に恵まれており、さらに体験活動や支援活動で培ってきた子どもと接するノウハウも持っているため、携わることになりました。

【プロセス・役割分担】※どのような協働を行ったか？ 実施するまで実施したプロセス

NPO 法人おやこでのびっこ安城、愛知教育大学大村教授、市生涯学習課等でこどものまち実行委員会を立ち上げるところからスタートしました。同大学学生・公募の市民等による大人スタッフと、小学校4年～中学3年から応募があった子どもスタッフたちが2ヶ月以上かけて企画運営を行いました。まず、大村教授からまちの理念や楽しさを学び、続いて実行委員会が作成した「こどもスタッフ会議ノート」をもとに、子どもたち自身で会議を進めます。役員・班・通貨・市長・店長も自分たちで決め、さらにまちのアイデアを出しあい、施設やお店、サービスの内容を話し合い、施設やお店に必要なものもみんなで作りました。

こどもスタッフ会議（平成24年）

月 日	内 容
8月22日	こどものまちについて、自己紹介
8月29日	役員、通貨、班の決定他
8月30日	まちの施設、お店について話し合い
9月8日	まちの施設、お店の決定
9月15日	施設、お店の班ごとに話し合い
9月22日	話し合い、市長の選挙
9月29日	話し合い、店長の決定
10月6日	全体の確認
10月13日	作業
10月14日	作業
10月19日	準備
10月20日	イベント当日
10月21日	イベント当日
10月27日	振り返り

役割分担

生涯学習課 行政の公共性、信頼性を生かし、予算、会場、スタッフ公募、イベントPR、こどもスタッフとの連絡などを担当

愛知教育大学 深い知識と技術を生かし、こどものまちの概念ノウハウの提供を担当

おやこでのびっこ安城

子ども体験活動や、子ども支援活動で培った子どもとのふれあいスキルと、NPO活動での人脈を生かし、こどもスタッフ会議サポート、大人スタッフとりまとめを担当

【効果・課題】※協働した結果どうなったか？（600字程度）

2日間行われたこどものまちの来場者はのべ1000人を超え、入場規制を行わなければならないほどの盛況ぶりとなりました。来場した子どもたちは、まず働こうと考える子が多く、働く側の店員ばかり増え、お客さんが少ない状態もありました。子どもたちにとって働くということは初めての体験であり、とても楽しいことです。そして、こうした中から、仕事をする事、コミュニケーションをとること、社会の仕組みを学ぶことができるのではないかと思います。子どもたちの感想では、「大人の世界を体験できた。みんなが笑って楽しんでいたので自分も元気をもらった。まちの仕組みがわかった。来年もやってほしい」などが聞かれました。これまで2回実施した中で、1回目のこどもスタッフの多くが引き続き参加してくれました。こどもスタッフ会議で話し合い、意見を出し、協力して作業する体験は子どもを豊かに成長させるものだと思います。また、違う学校、違う学年の子どもたちが、会議を重ねるごとに仲良くなり友達になれたことがとても良かったという感想がたくさんありました。

一方、課題もありました。こどものまちは子どもの自主性にまかせるため、本来大人が手を出さないのが基本です。しかし、うまくいかないまま見過ごしていいのかというところに、NPO・大学・行政それぞれの立場の違いがあったように思います。失敗してもいいから子どもたちに任せたいという気持ちと、せつかく何ヶ月もかかって準備したのだから成功させたいという気持ちが微妙な意識のずれとなり戸惑う場面もありました。じっくりと話し合い、事業本来の目的と方法、そして思いを共有する必要があると感じました。しかしながら、NPO・大学・行政が一つの事業を通して協力しあい、事業に取り組むことによって、それぞれの立場の垣根をこえたネットワークを作ることができたのは大きな成果だと思います。

B. 団体プロフィール

【団体名】 特定非営利活動法人おやこでのびっこ安城

【法人格の有無】 有

【設立時期】 2002年11月15日

【会員数】 60名

【活動地域】 三河地域

【ホームニュースなど】 <http://www.geocities.jp/oyakodenobikko/>

【目的】

～子どもたちが心豊かに育つ地域をめざして～

子どもたちは本来すばらしい能力や感性を持っていますが、今はその力を発揮しにくい状況にあります。生の舞台や芸術を通して得られる感動、自然の中でのわくわくどきどきする体験を通して、また、いろいろな人たちとの出会いを通して、子どもたちが伸び伸びと子ども時代を過ごし、豊かな人間として成長していくことを目的としています。子どもを一人の人間として尊重し、子どもが本来持っている力をサポートしながら、子どもをパートナーとして、子どもたちが心豊かに育つための環境づくり、文化的なまちづくりをめざしています。

【主な事業】

1. 子どもの体験活動（年に数回のイベント）

・自然体験活動

のびっこ森林隊一足助の山できこり体験と森での遊びを通じて、森の大切さを学ぶ活動

のびっこ野遊び隊一郡上八幡で、夏の川遊び、冬の雪遊びを通じて、自然の楽しさを知る活動

活動

・体験活動

のびっこ芸術体験教室—絵や書などの芸術体験をすることによって、表現する楽しさを知る

活動

科学教室—科学の体験をすることによって科学の楽しさを知る活動

・芸術鑑賞活動

コンサートや演劇など、生の舞台を鑑賞することによって子どもの感性を育てる活動

2. 子ども支援活動（日常におこなう活動）

・つどいの広場

未就園児と保護者が気楽に集う場「ほっとスペース」の運営。広場の実施の他、子育て講座やイベント、子育て相談室も実施している。

・チャイルドライン

18歳までの子どもの話を電話で聴く活動。「秘密は守る。名前を言わなくてもいい。どんなことも一緒に考える。切りたい時には切ってもいい。」という約束のもと、子どもの話を聞き、自ら問題を解決できるよう支援する。全国的な組織の中で活動しており、子どもは、フリーダイヤル 0120-99-7777 で毎日 16 時～21 時に電話をかけられる。

・こどものまち

こどもが主体となって、楽しみながら仕事や社会の仕組みを体験する活動。安城市生涯学習課、愛知教育大学、市内の他団体と共に、実行委員会のメンバーとして関わっている。

・市民向け講座

地域の問題をテーマとして取り上げ、市民と共に考える活動

・中心市街地活性化三世代交流事業

商店の店主を講師に招く講座を通じて、三世代の交流をおこなう活動

・子どもの権利条約を普及する活動

子どもたちや大人に、子どもが本来持っている権利を伝える活動

C. 協働ココが大事

【協働のポイント】

協働は本来各主体が対等の立場でなければなりません、組織として円滑に機能するのであれば、全員が理解したうえで、主体間に上下関係があっても差し支えないのではないかと思います。事業の企画段階から、各主体の貢献できることを十分に話し合っ、事業の目的や役割分担、責任の所在を明らかにしておく必要があります。しかし、意見が分かれ途中で行き詰まることもあります。自分の意見をきちんと主張し相手の意見もよく聴きお互いを理解し、じっくりと話し合い、思いを共有することによって、協力関係が促進されるのではないのでしょうか。また、まとめ役となる中心メンバーは、人を繋ぐコーディネーターの役割もあるため、豊かな人脈をもっている人の方がふさわしいと思います。

【団体からの一言】

「こどものまち」は、子どもを尊重し、子どもと大人がパートナーとして社会を作っていくという、私たち団体の理念を実現することのできる事業です。そういう意味で、この事業に関わることは団体にとって大変有意義でした。協働事業と言っても、実際には資金面のみの援助という形が多い中、「こどものまち」事業は、行政と大学とNPOが文字通り協働して実施する事業でした。安城市生涯学習課の職員、愛知教育大学の教授、学生、NPO 法人のメンバー、市民が関わり、協力して事業を作り上げることができたことは素晴らしいことだと思います。子どもと大人、異なった立場の大人同士がさらに信頼関係を築くことによって、より質の高い「こどものまち」が実現するのだろうと思います。

【あんねっとからの一言】

行政・大学・NPO 等による事業で、参加者数が1000人を超える、市内では極めて先進的な協働事例です。補助金だけの関係ではなく、すべての協働のパートナーがこどものまちのスタッフとして、企画・会議の運営・事前準備・イベント当日のサポートなどに参加し、子どもたちが描くまちの実現化というボリュームのある内容に関わっています。大人は見守る立場であり、あくまで主体は子どもたちであるがゆえの苦勞もうかがえます。また、協働ならではの難しさも語っておられます。それでも、2年連続でこどものまちを実施され素晴らしい成果をあげています。予算、会場の準備、スタッフ募集、事業のPRなどは行政が、こどものまちの概念・ノウハウなどについては大学が、子どもの主体性を重視した会議のサポート・全体の取りまとめはNPO 団体などが行いました。それぞれが強みを出し合い、しっかりとした役割分担の中で責任を果たし、協力して事業を作り上げる姿は、まさに協働のお手本ともいえる事例ではないのでしょうか。この事例が、これから協働による市民活動をお考えの団体の一助になれば幸いです。